

第六十回記念作品

創作「にっぽん」——まつりの四季—— ※各回上演

瑞穂の国日本、移ろい行く四季の国日本、美しく色鮮やかな日本、この小さな島国日本は春・夏・秋・冬の気候の変化に順応し、植物・生物も生滅を繰り返して人間と共生してきました。いや、そればかりか神も靈魂も、年中行事という民俗文化の中で太古から共に生きてきたのです。
『にっぽん』の四季と年中行事を、稲作と共に生きてきた我ら日本民族の一生と一年を、日本舞踊で表現してみようという試みです。

作・織田紘二

「出演者」

旭七彦、吾妻寛穂、吾妻豊太郎、泉彩葉、泉徳右衛門、泉徳保、泉秀樹、五條詠絹、五條珠太郎、中村梅、西川一右、西川扇左衛門、西川扇重郎、西川扇千代、西川扇衛仁、花ノ本海、花柳和、花柳克昂、花柳喜衛文華、花柳貴柏、花柳吉史加、花柳錦翠美、花柳紗保美、花柳輔藏、花柳寿々彦、花柳寿美琴音、花柳静久郎、花柳園喜輔、花柳近彦、花柳ツル、花柳寿華、花柳昌克、花柳昌鳳生、花柳路太、花柳染人、林千永、坂東里子、坂東映司、坂東映舞、坂東朋奈、坂東はつ花、坂東三津映、藤蔭静千華、藤蔭里燕、藤間京之助、藤間小太郎、藤間駒季、藤間爽子、藤間翔央、藤間仁風、藤間聖衣暉、藤間鶴熹、藤間豊彦、藤間直三、藤間秀暉、藤間裕太郎、藤間眞白、藤間蘭翔、水木紗那、水木優翠、若見匠祐助、若柳薫子、若柳吉應、若柳吉優、若柳公子、若柳里次朗、若柳三十郎、若柳美香康、若柳庸子
(十七日夜) (十八日昼) (十八日夜) (十九日昼) (十九日夜)
坂東勝友、勝美延三、坂東百々三、藤間豊之助、橘芳慧

「スタッフ」

作・構成 織田紘二
演出 尾上菊之丞
作曲 本條秀太郎
振付 西川大樹、花柳せいら、花柳達真、坂東三信之輔、藤間仁章
監修 織田紘二、古井戸秀夫
企画 吾妻徳穂、井上八千代、尾上墨雪、藤間藤太郎、若柳壽延



17日(金) 夜の部

一、清元「四季三葉草」
翁 西川扇藏
千歳 中村梅彌
三番叟 尾上墨雪

高い格調の中に日本舞踊らしい艶やかさと軽妙さを味わえる「四季三葉草」。四季の草花や樹木を詠み込んだ粋な清元の名曲にのせて、60回記念公演初日の幕開きを寿ぎます。

二、義太夫「妹背山道行」
橋姫 花柳幸舞音
求女 花柳寿美藏
お三輪 花柳智寿彦

一人の若者に想いを寄せる高貴な姫と情熱的な町娘の物語。恋する想いを芋環(おだまき)の糸に託して三人の恋模様を描かれます。色彩豊かな美しさも魅力の歌舞伎舞踊です。

三、長唄「洛中洛外」
(録音)
音羽菊蝶 山村若生子
猿若英晃 若柳延祐
西崎美絵 若柳吉恵三寿
花柳旭叟 若柳左千世
坂東藍乃 若柳佑輝子
藤間勘祐悟 若柳竜公
藤間巡子

季節の移ろいを色濃く感じる京の都。屏風絵「洛中洛外図」を題材に、祇園祭や壬生狂言、地藏盆など京都の風物を綴った作品です。京の四季を情緒豊かに写し出します。
作詞・柴崎四郎 作曲・十四代杵屋六左衛門 振付・若柳壽延

四、長唄「三人連獅子」
親獅子 榎茂都扇性
母獅子 山村光
子獅子 花柳源九郎

父母と子の愛情を細やかに描く連獅子で、通称「榎茂都連獅子」とも呼ばれます。片岡愛之助が榎茂都流家元、三代目扇性として出演。親子三人による毛振りは華やかさたっぷりです。
振付・二世榎茂都扇性

五、地歌「邯鄲」
かんたん
井上八千代

能の「邯鄲」の一部を下敷きに、末永く栄華を極める国土の様子を舞にした作品。端正で緊密な中にも柔らかみのある舞姿に、京舞井上流ならではの美が凝縮されています。

六、創作「にっぽん」

——まつりの四季——